

映画は今どこに？

——山形の「旭座」と南相馬の「朝日座」

吉田末和（桜桃社代表）

七日町交差点を東に向かうと旭銀座商店街がある。のちに「シネマ通り」とも名付けられたこの通りには映画館が数多く建ち並んでいた。

紅花通りと交差する角地には重厚な五階建てのビルが聳え立っていた。「旭座」は昭和の映画文化の最盛期を象徴する映画館で、同名の芝居小屋がその前身である。1917（大正6）年に宮崎合名社が映画館に改装、1955（昭和30）年に鉄筋コンクリート造りの建物になり、名前も「シネマ旭」と改称された。壁面に縦書きで大きく「ASAHIZA」と記された姿を思い浮かべる山形市民も多いだろう。2007年に閉館が決まっただけからなおその姿をとどめていたが、いよいよ取り壊しが決まり、この原稿を書いている2013年9月現在にも少しずつ解体工事が進んでいる。

「シネマプラザ」「ミュージズ（元霞城館）」「シネブラッサ（元銀映）」、少し離れて「シネアート」「山形宝塚」「スカラ座」「ヌーベルF」など、昭和から平成までの時間を俯瞰すると、周辺の街路に点在したものも含めてたくさんの映画館が次々に生まれていった。人々が記憶している映画館の名前や街のイメージは、その人が生きた時代やもともと映画を観た時期によって、おそらくそれぞれ違っている。

これらの映画館は今ではすべて閉鎖

され、この限界で映画を見ることはもうなくなってしまった。映画が大衆娯楽という言葉で一括りにできなくなったこと、あるいは個人の表現手段としての芸術という側面が大きくなったことと、かつて頻繁に通っていた映画館から人々の足が少しずつ遠のいていく現象は、ほぼ同時期に訪れた。それは実在の空間としての映画館や映画街を支えきれなくなったという決定的な事実であった。

相次ぐ映画館の消滅を嘆く声は日本全国で聞こえている。「ともにある Cinema with Us 2013」で上映される藤井光監督『朝日座』もまた、そんな歴史の変化を真正面から受けた映画館についてのドキュメンタリーである。福島県南相馬市原町区にある「朝日座」は、震災を経て様々な葛藤や紆余曲折をたどりながらも、最終的に存続することを決めた。原町区の人たちは、映画館の再建がそのまま人口増加や活気溢れる町並みの蘇生、ましてや震災後の復興などに結びつくのではないことをよくわかっている。その上で手の届く範囲から少しずつ復活を試みることで、映画館という空間を守ろうとする。作品が記録しているのは、人々の思いを受け止める器としての映画館の復興という、未完成の過程そのものである。

山形においては、何としてでも「旭

座」を残そうという思いは、現実の風景を見る限りでは叶わなかった。だが、たとえばYIDFFにも毎回たくさんの作品が寄せられるように、映画人口が減ったのでもなく、日々新しい映画は生産され、そして世界中で享受されているはずだ。わたしたちはむしろこのように考えるべきなのかもしれない。映画は今どこにあるのだろうか？ 多くの映画館が失われた今、それは映画館以外のところに少しずつシフトしている。場所なき場所に宿る映画の魂の行方を見つめることが、新しい映画文化の目指す方向なのではないか。そしてこの問いに対する答えは、おそらく映画を観たいと思う誰もが求めているものだ。

南相馬の「朝日座」と山形の「旭座」は興隆から衰退までの過程も地域の中での位置づけもとてもよく似ている。それだけに両者の対照的な選択は大きな岐路のようにも見える。だが「朝日座」が見ている未来と、「旭座」なき山形が探しているものが、実はどこかでつながっていて、いつか同じところにたどりつくのかもしれないという希望はまだ失われていないように思われる。

■上映

『朝日座』【CU】 10/14 13:10- [M1]

■講演とシンポジウム

「映像文化創造都市を目指して」【YF】

講師：大阪市立大学大学院創造都市研究科・佐々木雅幸教授

..... 10/14 10:00- [M5]

ミュージズ Muse (YIDFF2005)



旭座（シネマ旭）跡地



シネマ旭 (YIDFF2005「旭ナイト」)

